

# しあわせ

6 月 号



お亡くなりになられた

とこのことは

いまここにいらっしゃる

このことですか。

## 「手を合わせる母」

六月は陰暦では、水無月（みなづき）といわれる。太陽暦になおすと六月の終わりから八月初旬になるとのこと。梅雨から梅雨明けにかけての時期である。

諸説あるらしいが、田に水を引かねばならない時期に梅雨明けとなることから、無を「の」と発音し水の月。あるいは田に水を引くため、田以外へ流用する水が無くなる月という意味だそうだが数字で表す現在のカレンダーよりもやはり情緒があつて奥ゆかしい。

科学技術が発達し、何ごとも合理的な判断や対処が求められる現代社会にはオブラートで包んだようなゆとりがなくなった。

ロシアによるウクライナ侵攻も、自国の利益のためには他者への思いやりなどかけられない。目的のためには手段を択ばないという我利我利亡者としか言いようのない暴挙だ。「我こそは・・・。」と名のりを挙げて戦う武士道。「卑怯者」というそしりを嫌う文化があつた日本人には理解できない

## 法座案内

△安居会法要▽

六月 十日（金） 昼席・夜席

十一日（土） 昼席

講師 牛尾かをり師

（本願寺派 布教師）

△法味の会▽

六月 十七日（金） 午前十時

お話 自坊住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三  
栢原山 龍仙寺

電話（〇八二）二八二四八二



「はア、おなか苦しいわあ…。」

あ、たまごスープ飲まんと！」

「お母さん、それ文脈おかしいですよ」

ある夕食時の母と坊守の会話です。たしかに、

「おなか苦しい…。もうスープは飲めんわ」

なら文脈は通りますが、おかしいですね。笑  
いながらも、わたしたち凡夫の文脈は、やっ  
ぱりおかしいのだな、と思ひ合わせました。

ものごとには文脈があり、どのような文脈  
のなかでものごとを受けとめるのか、それに  
よって目のまえの景色は一変します。命も同  
じです。生・老・病・死という命のことでわ  
り変えられませんが、わたしがその命をどの  
ような文脈のなかで生きるのか、それによっ  
て、命の景色はすべてが変わります。ただし  
問題は、わたしたちの文脈は根本的に間違っ  
ており、凡夫の考える文脈では、この命を尊  
いご縁として受けとめきれないことです。

昔、利井明弘先生から、ご尊父の三回忌の

ときの話を伺いました。多くのお寺さんと一  
緒にご法要をお勤めした後、お斎をよばれる  
ことになりました。お斎の準備は、ご門徒の  
お婆ちゃんが采配してくださったそうです。

まず施主の明弘先生がご挨拶をされ、合掌し  
てお弁当をあげたそのとき、「あ！」と、あ  
ちこちから声が上がりました。ばら寿司だっ  
たそうです。亡くなられた先生は有り難い方  
であつたと同時に、厳しい方でもあり、けっ  
してお仏事で雑（お肉やお魚）を許される方  
ではありませんでした。ですから、みんな当  
然、お精進と思つていたわけです。その声を  
聞いたお婆ちゃんが飛んで来られ、皆の前で  
畳に額をこすりつけて言われました。

「申し訳ございません！」

すべて取り換えさせます！」

なにか間違いがあつたことはすぐ分かりまし  
たので、みな「まあまあ、こういうこともあ

りますから」となだめました。お婆ちゃんは

一歩も引きません。見かねた明弘先生が、

「まあまあ、〇〇さん。父もきびしい人やつた

けど、もう亡くなられて今日は三回忌や。きよ

うはこれでええにしましょうや。」

と声をかけると、お婆ちゃんは仰いました、

「お亡くなりになられた、いうことは、いま

ここにおられる、いうことですな。こんなお恥

ずかしいことはございません！」

これがツルの一言となり、お弁当はすべて回収

されてしまったそうです。明弘先生が「あの婆

さんは、ごつつい婆さんやつた」と嬉しそうに

話してくださいましたのを覚えています。

命の文脈が、お婆ちゃんだけ違っていただけ  
ですね。先生はお亡くなりになった、それは共通  
認識ですが、「だから、今日はいいにしましょう」  
と多くの人が言ったのに対し、お婆ちゃんは「だ  
から、こんな恥ずかしいことはありません」と  
仰いました。なぜでしょう。

お婆ちゃんにとっては、話はむしろ反対でし  
た。先生が生きておられたなら「今日は先生お  
られないから、これでええにしよう」と言える。  
先生も凡夫であつたからです。しかし、命終え  
られたということは、仏さまになられたとい  
うこと。凡夫にはごまかしはきいても、仏さまに  
逃げかくれる場所はない。だからこそ「こん  
な恥ずかしいことはない」と、お婆ちゃんは畳  
に額をこすりつけるようにして仰つたのでし  
た。それは、仏さまが紡いでくださる命の文脈  
を生きておられた、まさしく「ごつつい」お婆  
ちゃんの姿でした。

わたしの文脈と、仏さまが紡いでくださる命  
の文脈、どちらが真実でしょう。ともにお念仏  
いただきましょう。わたしにはむなしく亡く  
なっていく命としか思えません。が、仏さまは喚  
び続けてくださっています。「どうかわが国に  
生れられるのだと思っておくれ。汝はかけがえ  
ないわが子なのだから」と。